

日本人の美意識 舞台で表現



まちだ人 能楽師

井上貴覚

能楽最古の流儀、金春流の能楽師である井上貴覚さんは昨年、40代で国の重要無形文化財(総合)に認定された。世界に誇る日本の舞台芸術を背負う人材として活躍している。

室町時代の観阿弥・世阿弥が舞台芸術に昇華させ、650年にわたり継承されてきた能楽の世界。「長い時間をかけて紡がれ、洗練された日本人の美意識があふれている」と井上さん。「鑑賞だけでなく習い事としても親しんでもらいたい」と能の普及にも意欲的だ。

大学受験を控えていた17歳の冬、図書館の棚から何気なく能楽の本を手にとったことが全ての始まり。何冊か読み重ねるうち、日本文化や伝統技能に漠然と抱いていた憧れが、鮮やかな輪郭を帯び始めた。本で知った能楽最古の流儀、金春流のシテ方になりたいと考えたのだ。

思春期のまっすぐな行動力はさまざまな。著者の住所を電話帳から探し当て、能楽師になりたいと手紙につづった。「二度、舞台をご覧なさい」と返事が届き、公演の招待券が添えられていた。初めて観る舞台に息を飲み、今度は演者の住所を聞いて手紙を書いた。それならと自宅に招いてくれたのが、後の師匠で金春流能楽師の仙田理芳さん。「親御さんに話をしてからもう一度来なさい」と師匠に言われた。能楽師になると両親に打ち明けると、大学には行けと猛反対。でも夜学

に通うことを条件に入門を許してくれた」と話す。能楽研究で有名な法政大学文学部に入学したのと同時に入門、内弟子となり夜学に通いながらの修業が始まった。

シテ方は謡(うたい)と舞を担当する舞台の主役で、いくつかの流儀が存在する。金春流のシテ方を目指したのは「最も歴史が古

く、能の原点と言える流儀で、素朴にして雄渾な芸風。華やかな京の風景より、奈良、飛鳥のような素朴な原風景を感じたから」。1990年の入門から、94年に、



「服」を舞う井上さん(撮影・辻井清一郎)



金春流の「謡本」。古典文学などを題材とした全171演目がある



愛用の能面を見せる

井上 貴覚 Yoshiaki Inoue

1971年2月22日生まれ(50歳)。19歳で入門し、現在は公益社団法人金春円満井会の理事を務める。2020年に国重要無形文化財(総合)認定。まちだの寺子屋の教室に関する問い合わせは☎042-799-7966(9時~21時) ✉yoshiaki1971222@yahoo.co.jp

町田市民文学館で例年1月、「はじめてのお能体験教室」を担当(今年は新型コロナウイルスの影響で中止)。能面や楽器を持ち込み、謡や仕舞(しまい)を体験してもらおう企画だ。「文学館という場所ですので、謡本(うたいほん)／謡われる言葉と節付の記号を記した稽古本)を朗読するところから始め、音楽にのせた時の言葉の響き、そして言葉を動きで表現することで、表現がどんどん広がるということを伝えたい」と語る。

昨秋から高ヶ坂の祥雲寺で「まちだの寺子屋 謡・仕舞教室」もスタートした。公演の合間に毎月2回開講している。「能楽の世界は敷居が高そうではあるが、能の装束、能面の彫刻、和の音楽など何でも構いません。謡本を文学作品として読んでほしい。習い事としてお稽古が進めば、国立能楽堂での発表会で舞台にも立てる。日本の美の奥行を能を通じて楽しんでほしい」と目を細めていた。

演目「江口」で初舞台を踏み、96年に「簾」(えびら)で初シテを勤めた。秘曲とされる「獅子」「乱」「道成寺」「翁」を舞い、同流儀の若手能楽師4人で同人「座・S Q

UARE」を結成するなど、次世代の旗手として注目されている。転勤族の父を持ち、多感な少年時代の数年を奈良県橿原市で過ごす。